

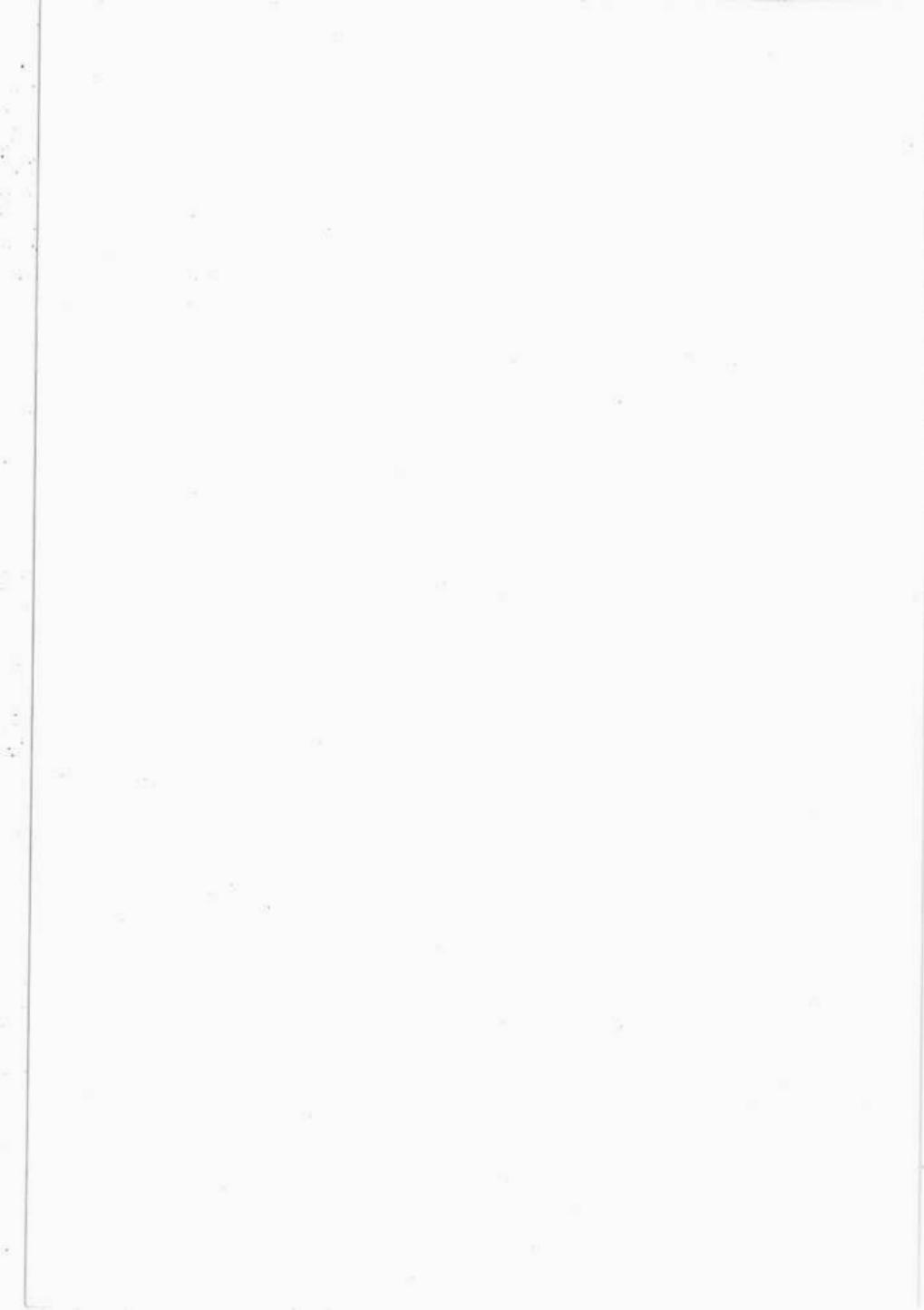
〒371 前橋市上泉町 664-4  
前橋市教育委員会管理部文化財保護室  
TEL 0272-31-9534

# 昌楽寺廻向Ⅱ 遺跡

群馬県労働者住宅協会の事務所建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

前橋市埋蔵文化財発掘調査团







## 序

前橋市は北に赤城山、西に榛名山を望見し、北から南に貫流する利根川は、市域を潤し「水と緑と詩の町」にふさわしい前橋市を作り、古くは「糸の町」として養蚕、製糸で栄えてきた県都であります。

今、生涯学習都市を目指し、教育、文化、商工業の調和ある街づくりが進められ、中心市街地の再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地造成事業など、住宅地等の造成が進められています。当昌楽寺廻向Ⅱ遺跡（前橋市総社町総社字昌楽寺廻村東2882番3）は高層住宅建設にさきがけ、発掘調査を実施したものです。

当遺跡周辺は、上野国府推定地域を始め、国分僧寺跡、国分尼寺跡、山王庵寺跡等、古代上野国の政治・文化の中心地域であり、調査では縄文時代、奈良・平安時代の遺構、遺物がたくさん検出できました。

本報告書を刊行するにあたり、群馬県労働者住宅協会を始め、多くの方々の御協力を戴き厚く感謝申し上げます。

本報告書がこの地域の歴史解明の資料として、少しでも御利用戴ければ幸甚であります。

昭和63年10月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 二瓶 益巳



## 例 言

1. 本書は群馬県勤労者住宅協会が事務所建設（前橋市総社町）にさきがけて、文化財保護法第57条の2 第1項の規定により発掘調査を行った報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長二瓶益巳）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211-1 代表取締役須永真弘）が実施した。
3. 調査担当者 遠藤和夫（前橋市教育委員会管理部文化財保護室主任）  
新保一美（ 同 上嘱託）  
金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）  
白石光男（ 同 上 第二グループチーフ）  
長島郁子（ 同 上 第二グループサブチーフ）
4. 遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。  
遺跡名 昌楽寺廻向【遺跡 略称 63A-36  
所在地 前橋市総社町総社字昌楽寺廻り村東2882番3他4筆  
調査期間 発掘調査 昭和63年8月 8日～ 8月29日  
遺物整理 昭和63年8月30日～10月31日  
調査対象面積 280m<sup>2</sup>
5. 本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。
6. 本書は、スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集総括を金子正人が当たり、白石光男と長島郁子が執筆した。小林康典が遺物の実測とトレース、吉田公夫が遺構のトレースを担当し、写真製版は鈴木赳夫、作業事務は柴崎信江が行った。
7. 測量計画、技術指導は須永真弘（測量士第52614号）が行い、測量に板垣宏、須永嘉明、吉田公夫が参加した。
8. 本調査に際して、多大な御協力を戴きました群馬県勤労者住宅協会、地元市民の方々に、厚く御礼申し上げます。
9. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（敬称略）  
安藤道人、 石島正二、 萩野博巳、 石井きよ子、 角田朱美、 佐々木智恵子、  
石川サワ子、 内山恵美子、 河西三明、 近藤俊男、 近藤充郎、 藤田光夫、  
山崎勘治

## 凡 例

### 1. 遺構の略号

H-住居址 D-土坑 I-井戸址 P-ピット S-石

### 2. 実測図の縮尺

全体図 1:150 住居址・貯蔵穴 1:60 (カマド 1:30)

土坑・井戸址・ピット 1:60 出土遺物 1:3

### 3. □ 遺構中におけるカッコ内の数値は推定値を表す。

### 4. 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」を参考にした。

### 5. 摂図中のスクリーントーン表示 は焼土を表す。

### 6. 各住居址の床面積の数値はプランニメーターを使用した。

## 目 次

### 序

### 例言

### 凡例

### 目次

I 調査の経過と方法	1
1. 経過	1
2. 方法	1
II 周辺の遺跡	2
III 遺跡の立地と地層	3
1. 立地	3
2. 地層	3
IV 遺構	5
1. 住居址	5
2. 土坑	9
3. ピット	11
4. 井戸址	12
V 出土遺物	13
1. 出土遺物観察表	13
VI おわりに	19
実測図 図版	

## I 調査の経過と方法

### 1. 経過

昌楽寺廻向Ⅱ遺跡は、前橋市教育委員会の試掘調査により遺跡が確認され、前橋市埋蔵文化財発掘調査団からの委託により調査を実施する運びとなった。調査は昭和63年8月8日(月)～8月29日(月)まで実働日数15日間で行われた。以下日誌より抜粋。

8月 8日	休憩所設置、機材等の搬入。
8月 9日	座標測量。
8月 9日～8月16日	トレーンチ設定、ジョレン掻き、住居址プラン確認。
8月17日～8月19日	グリット杭打ち、ジョレン掻き、住居址・焼土プラン確認、土坑内人骨精査、水準測量、平面測量1/200、写真撮影。
8月20日～8月22日	住居址プラン確認、遺構精査、セクション取り、全体平面測量1/100、写真撮影。
8月23日～8月29日	住居址プラン確認、遺構精査、セクション取り、遺跡測量1/20、遺物取り上げ。
8月29日	休憩所、機材等の搬出。昌楽寺廻向Ⅱ遺跡発掘調査終了。

### 2. 方法

昌楽寺廻向Ⅱ遺跡は、前橋市総社町総社字昌楽寺廻向村東2882番3(他4筆)に所在する。当初、前橋市教育委員会により試掘調査が行われ、その結果、焼土、土師器、須恵器等の遺構、遺物が確認されたため、調査面積約280m<sup>2</sup>を全面調査するに至った。発掘調査は焼土を中心にしてジョレンでプラン確認を行い、確認困難であるものはトレーンチを設定し確認に努めた。

調査グリットは座標(C-1グリット杭でX=44470.000m、Y=-71130.000m)を基に、北西隅を基準に縦線(南北方向)をA、B、C、Dまで、経線(東西方向)を1、2、3...6まで各々4m幅で設定した。また、グリットの呼び方は北西交点を使用した。高さは標高123.00mを設定し、これを基準とした。住居址はカマドを基準に範囲を調査し、カマドは遺存状態の良いものは十字に切り、それ以外は半裁し、土層観察後作り方を調査した。土坑、井戸址は半裁し、土層観察後完壊した。出土遺物はグリットごとに取り上げ、遺構に伴い重要であると判断したものは、図面に記録後取り上げた。

図面は、全体をS=1:100で、セクションと各遺構はS=1:20、カマドはS=1:10で作成した。写真撮影は、現況、遺構、土層断面、出土遺物等を撮影し、使用フィルムは白黒、カラー、リバーサル等で記録した。

## II 周辺の遺跡



第1図 周辺の遺跡

- |            |          |           |            |
|------------|----------|-----------|------------|
| 1 昌樂寺廻向Ⅱ遺跡 | 2 桜ヶ丘遺跡  | 3 柿木遺跡    | 4 二子山古墳    |
| 5 愛宕山古墳    | 6 遠見山古墳  | 7 宝塔山古墳   | 8 蛇穴山古墳    |
| 9 村東遺跡     | 10 山王廃寺跡 | 11 上野国分寺跡 | 12 上野国分尼寺跡 |
| 13 草作遺跡    | 14 天神遺跡  | 15 寺田遺跡   | 16 元続社明神遺跡 |
| 17 王山古墳    | 18 生川遺跡  | 19 五反田遺跡  | 20 村前遺跡    |

### III 遺跡の立地と地層

#### 1. 立地

本遺跡は前橋市總社町總社字昌楽寺廻村東2882番3付近にある。この辺りは畑作地帯で桑、野菜が作られている。遺跡のほぼ西側には、市道大友西通り線（産業道路）が北西方向から南東方向に走っており、北側500mのところには県道前橋箕郷線が東西に走っている。遺跡地から北を向くと右手から赤城山、武尊山、榛名山を望むことができ、南には関東平野が広がっている。

本遺跡を取り巻く地域の要因は利根川、旧利根川低地帯、相馬が原扇状地と前橋台地、相馬が原扇状地を流下して前橋台地に流れる河川群である。河川をみると、遺跡地周辺には牛王頭川、八幡川、牛池川、染谷川、滝川などが流れしており、遺跡地の北東方向150m付近では八幡川が天狗岩用水と合流し滝川となって北から南へ流れている。また東1.3kmのところに利根川が北から南へ流れている。したがって、本遺跡地付近は緩やかな傾斜地形で、前橋台地を基盤しながらも、相馬が原扇状地の末端地に当たる地域である。標高は約123mである。

#### 2. 地層

昌楽寺廻向Ⅱ遺跡は前橋市の北西部、利根川右岸前橋台地上に位置しており、榛名山東南麓に形成された相馬が原扇状地の影響が考えられる場所である。この相馬が原扇状地は、火山山麓扇状地の形態をとり、扇頂は標高600m付近に求められ、扇端は高前バイパス付近まで広がる可能性があるとされ、また構成としても、前橋泥流を基盤にしながらも、古期扇状地と新期扇状地が埋積関係にあり、堆積物も扇頂から扇央部では泥流及び火碎流、扇端部では砂質及びシルト質の堆積物で構成されていると言われている。

本遺跡では、位置的には扇端部に位置しており、地層的には新期扇状地堆積物と思われる砂質層が5層で確認できた。また3層ではFP混入が認められ、この層より遺構が確認できた。1、2層は軽石粒を多少含んでいるが擾乱を受けており、本来の地層は成していないと思われる。なお、現地形は既に削平を受けており、本来の地層は現地層より数層多くなると思われる。



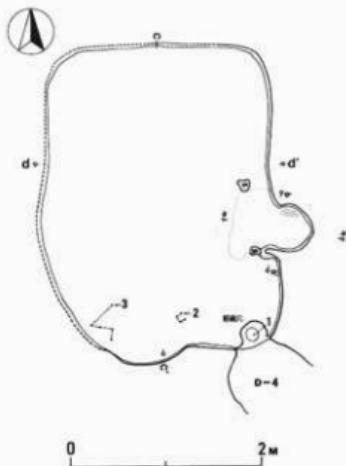
第2図 基本土層

第3図 昌楽寺廻向Ⅱ遺跡全体平面図



## IV 遺構

### 1. 住居址



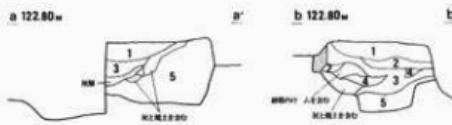
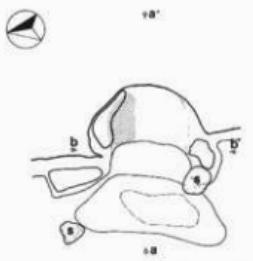
第4図 1号住居址



#### H-1号住居址 墓床

- 褐色土層 土質は硬 粘性有り 3cm程のロームブロックを多く含む。(駆除)
- 褐色土層 土質は硬 粘性有り 3種の陶器片をならした層か?
- 黄色土層 土質は普通 粘性なし 砂質のローム層。

目測跡	1号住居址 (B-1グリット内)	
平面形	方形 南北にやや長くコーナーは丸みを持つ。	
主軸方位	N - 90° - E	
規模	長さ 3.20m (基礎南北) 幅道 2.58m (基礎東西) 面積 約 7.58m <sup>2</sup>	
壁高	東 1.3, 5~22cm 南 1.5, 5~16cm 北, 西平均 垂直に立ち上がる。	
柱穴	なし ピット なし	
窓穴	南西コーナー部分にあり、長辺が窓戸の代用した可能性がある。 なし	
備考	床面は10cm程の厚さで、駆除(褐色土とロームとの混合)されていた。 南西コーナー付近に丸い突り出しがある。	

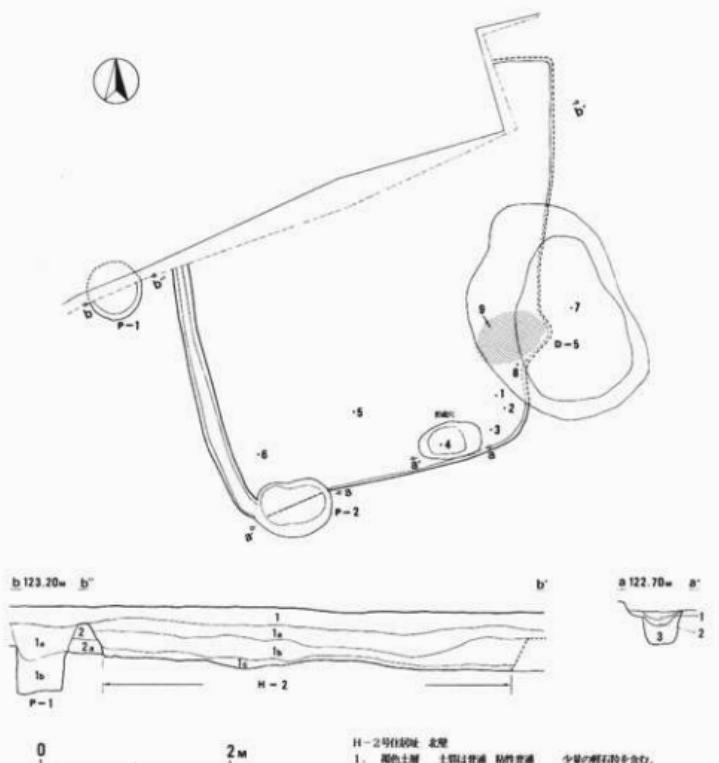


#### H-1号住居址 カマド

- 褐色土層 土質は硬 粘性有り FP粉を少額含む。
- 褐色土層 土質は良 粘性有り 硫酸鉄を少額含む。
- 暗褐色土層 土質は良 粘性有り 硫酸鉄を多額含む。
- 暗褐色土層 土質はソフト 粘性なし 硫酸鉄を含む。
- 明褐色土層 土質はソフト 粘性少し有り カマド下層面ロームブロック層。

カマド位置	東壁中央前面寄り (1.30m)	主軸方位	N-101°-E (1.50m)
全長	不明	最大幅	1.50m
埋没部	不明	埋没部	立上がり角
放き口部	幅 (0.8m)	立上がり角	約6.7° 斜傾
備考 墓床状態は良くなく、左側は剥離されていた。右側は礫石が存在する(用材ばら)の所。 前面に落ち込みがあり、長さ160cm、幅60cm、深さ90cm程度である。			

第5図 1号住居址カマド



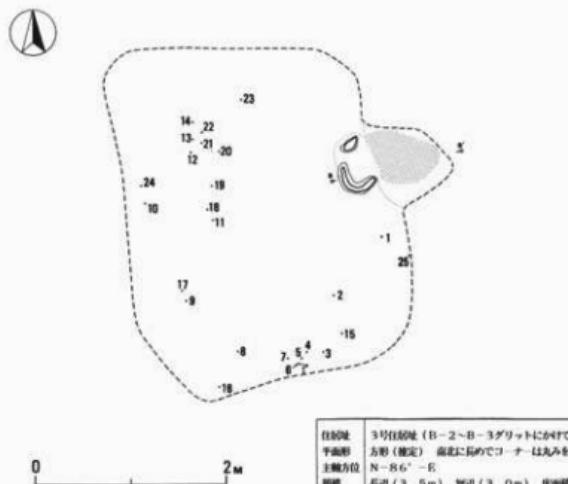
第6図 2号住居址

住居址 平面形 主軸方位	2号住居址 (B-O-C-Oグリッドにかけた) 長方形 北東コーナーが山み出で型のプラン。 N-72°-E
規模 壁高 窓穴 貯藏穴 周溝	周溝 (4.0m) 壁高 (3.6m) 周溝隙 不明 西23×28cm 高19~26cm 北側は不明 傾斜に立ち上がる。 なし ピット P-2が有り。 南壁東コーナー付近 南西長 65cm 南北長 40cm 深さ38cm 西壁一部西面 所々にピット有り 深さ4~8cm
備考	一部開拓の存在が認められた。平面図は一部調査区域外であるため概定プランである。

H-2号住居址 西北穴			
1.	褐色土層 土質は普通 粒性普通 少量の碎石粒を含む。		
1a.	褐色土層 土質は普通 粒性有り F層を含む。		
1b.	褐色土層 土質は普通 粒性有り 1~2cmのロームブロックを含む。		
1c.	灰褐色土層 土質は普通 粒性有り 3~4cmのロームブロックを多く含む。		
2.	黄色土層 土質は普通 粒性やや有り 物理的ルート層。		
2a.	黄褐色土層 土質は普通 粒性有り 織まりのあるルート層。		

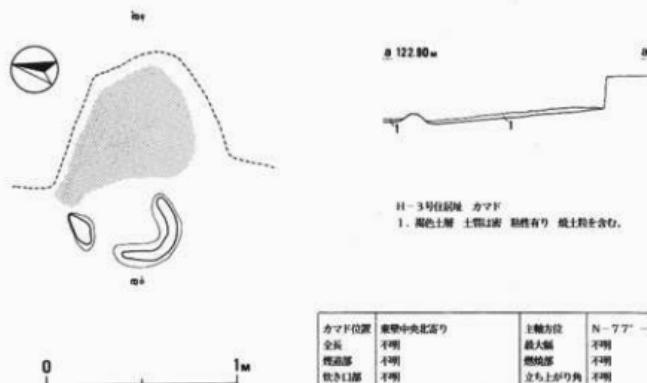
カマド位置	東壁中央南寄り付近	主軸方位	不明
全長	不明	最高部	不明
埋没部	不明	傾斜部	不明
底付口部	不明	立ち上がり角	不明

備考 板土を僅かに残すのみで、カマドとしての形をとどめない。



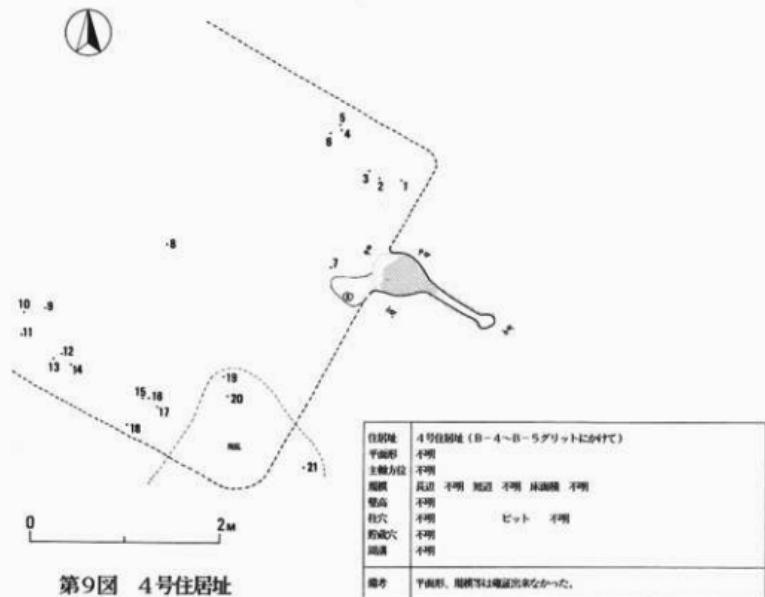
第7図 3号住居社

住居社	3号住居社 (B-2～B-3グリットにかけて)
平面形	方形 (概定) 面北に長めのコーナーは丸みを持つと思われる。
主軸方位	N-8.6°～E
規模	長辺 (3.5m) 幅辺 (3.0m) 面積 (9.8m <sup>2</sup> )
壁高	不明
柱穴	なし ピットなし
筋歯穴	不明
周路	なし
備考	手うでで床面が3ヶ所存、一部踏跡らしき場所有り。

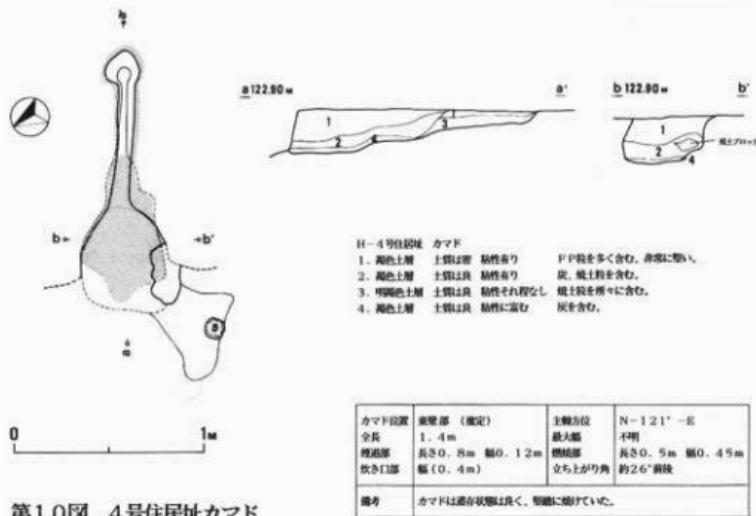


第8図 3号住居社カマド

カマド位置	東壁中央北寄り	主軸方位	N-7.7°～E (概定)
全長	不明	最大幅	不明
煙道部	不明	燃焼部	不明
供給口部	不明	立ち上がり角	不明
備考	取扱目とんどどめていなかったが、土壌の凹りは比較的良い。手掘にロームの高まり有り。		

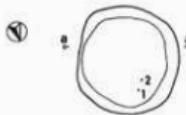


第9図 4号住居址



第10図 4号住居址カマド

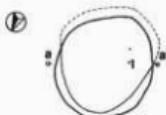
## 2、土坑



a 122.70m      B'

土坑名	1号土坑 (C-I グリット内)
平面形	円形
断面形	円錐形
層 構	東西1. 1m 南北1. 15m 深さ0. 25~0. 28m
備 考	シルト質層まで掘り込んでおり、底部、壁面ともに堅く締まっている。出土遺物は石器2点。

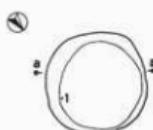
D-1号土坑  
1. 黄褐色土層 土質は密 粘性有り C帯G鉢を少量含む。  
2. 明褐色土層 土質は普通 粘性少し有り ソフトロームブロックを少量含む。



a 122.70m      B'

土坑名	2号土坑 (C-I グリット内)
平面形	円形
断面形	透台形
層 構	東西1. 0m 南北1. 15m 深さ0. 45~0. 5m
備 考	シルト質層まで掘り込んでおり、底部、壁面ともに堅く締まっている。出土遺物は鍛冶工具1点。

D-2号土坑  
1. 黄褐色土層 土質は密 粘性有り FP鉢を少量含む。  
2. 黑褐色土層 土質は柔らかい 粘性有り C帯G鉢を含む。  
3. 反褐色土層 土質は良 粘性なし 砂質ローム層。



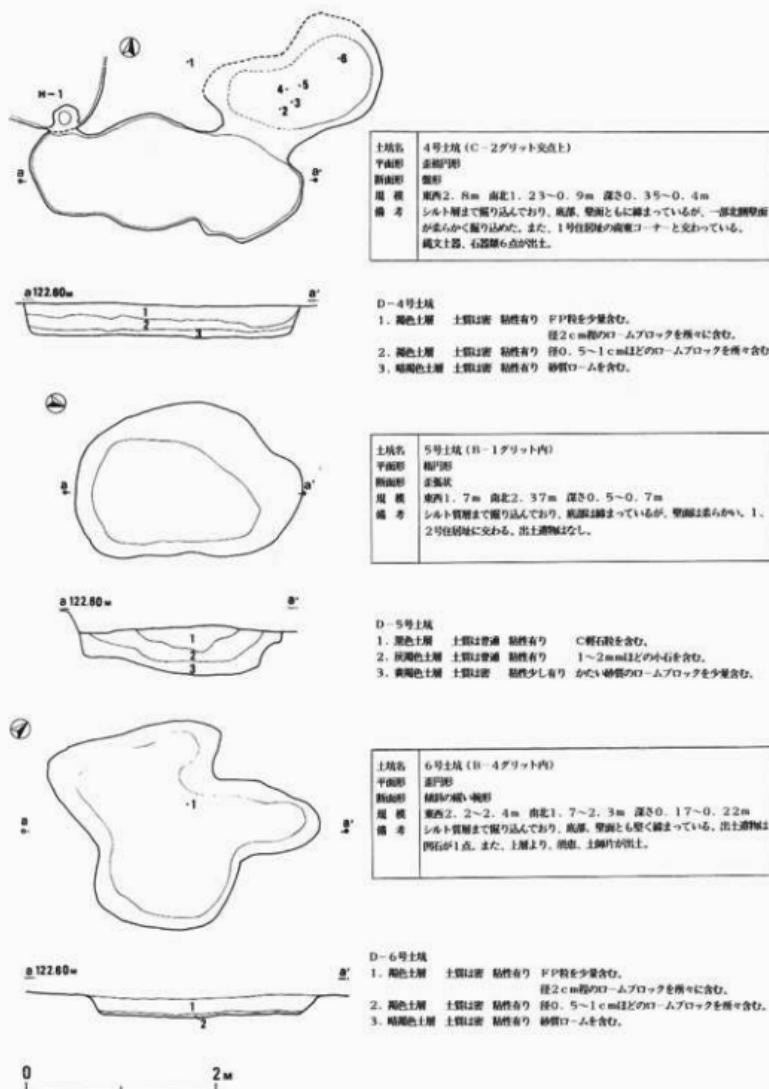
a 122.80m      B'

土坑名	3号土坑 (C-II グリット内)
平面形	円形
断面形	円錐形
層 構	東西1. 1m 南北1. 1m 深さ0. 30~0. 35m
備 考	シルト質層まで掘り込んでおり、底部、壁面ともに堅く締まっている。出土遺物は石器1点。特に加工した痕跡はない。

D-3号土坑  
1. 黄褐色土層 土質は密 粘性有り FP鉢を少量含む。  
2. 黑褐色土層 土質は密 粘性有り 径0. 5~1cmのロームブロックを含む。  
3. 反褐色土層 土質は密 粘性有り 砂質ロームを含む。

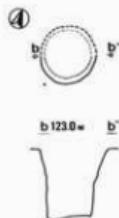
0                          2m

第11図 1. 2. 3号土坑

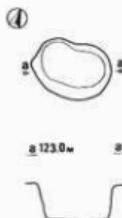


第12図 4. 5. 6号土坑

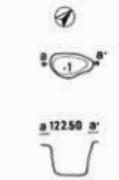
### 3 ピット



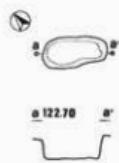
ピット名	1号ピット (B-Oグリット内)
平面形	円形 (確定)
断面形	円錐形
東 西	東西0. 55m 南北(0. 55m) 深さ0. 75m
備 考	半分が調査範囲外であるため、断面は推定である。出土遺物なし。



ピット名	2号ピット (C-Oグリット内)
平面形	非円形
断面形	円錐形
東 西	東西0. 7m 南北0. 5~0. 6m 深さ0. 38~0. 44m
備 考	H-2の南西コーナーに存在し、H-2の一端とも考えられる。往跡から取り出した壁は堅いシルト層だが、自脱離性砂質の盛らかで表面とのかかわりがはっきりしない。また、底盤は堅く締まっている。出土遺物なし。



ピット名	3号ピット (D-Oグリット内)
平面形	椭円形
断面形	円錐形
東 西	東西0. 45m 南北0. 25m 深さ0. 33m
備 考	シルト質層まで掘り込んでおり、底盤、壁面とともに堅く締まっている。出土遺物は石器が立った状態で1点出土。

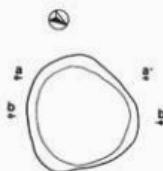


ピット名	4号ピット (C-Iグリット内)
平面形	開丸方形
断面形	円錐形
東 西	東西0. 65m 南北0. 33m 深さ0. 21~0. 24m
備 考	シルト質層まで掘り込んでおり、底盤、壁面とも堅く締まっている。出土遺物なし。

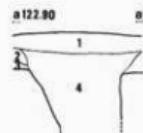


第13図 1. 2. 3. 4号ピット

#### 4 井戸址

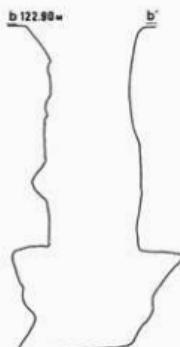


井戸名	1号井戸 (A-A'グリット内)
平成形	円筒形
深度	底まで円筒形だが、底部付近は五円錐形
周 長	東西1.2m、南北1.23m、深さ3.45m
備 考	底さ2.4m付近まではシルト質の粘土層で、形状もしっかりしているが、底部付近ではシルト質が柔らかくなり、形状も崩れてくる。出土遺物は底部より火山起源が1点出土。



井戸  
1. 黄色土層 土質は密 粘性少し有り 0.5~1cmほどの軽石混を含む。  
2. 暗褐色土層 土質は密 粘性有り  
3. 灰褐色土層 土質は密 粘性有り  
4. 黄色土層 土質は普通 粘性少し有り B軽石混を含む。

0 2m



第14図 井戸址

## V. 出土遺物

昌楽寺廻向Ⅱ遺跡出土遺物観察表(1)

法量の下限は推定値

出土位置	種類	法量(cm)	土・越・色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存・備考
H1-1	瓦 土器器	口: 底: 4.4 肩: 20.1 高: 30.9	やや硬 黒褐色	口縁部及び底部くな い斜面に最大径を有す	外面: 口縁部黒化で 肩部~底部にかけて横割れ 内面: 黒化	口縁欠
H1-2	环 形器	口: 13.9 底: 10.4 肩: 高: 3.8	軟 透光 灰褐色	底部に高台を作り出して いる	外面: 口縁部黒化で 底部横割れ 内面: 黑化	環完整
H1-3	台型 形器	口: 底: 9.3 肩: 18.5 高:	軟 透光 灰褐色	外側上部が張る 体部に自 然縫の痕あり	外面: 黒化で 口縁部横割れ後底部台脚り付け 内面: 黒化	頭部、台脚
H2-1	环 形器	口: 15.5 底: 肩: 16.1 高: 3.6	軟 透光 灰褐色	口縁部内折し底部丸底	外面: 口縁部黒化で 底部横割れ 内面: 黑化	環完整
H2-2	瓦 土器器	口: 19.1 底: 8.8 肩: 16.9 高: 18.9	軟 透光 にねじ褐色	口縁部は強めに外折する 底部指抜け	外面: 口縁部黒化で 体部横割れ一部裏剥落 内面: 黒化	環完整
H2-3	瓦 土器器	口: 20.7 底: 肩: 高:	軟 透光 にねじ褐色	口縁「く」の字形に板 し頂部以外に聞く	外面: 口縁部黒化で 体部横割れ 内面: 黒化	口縁
H2-4	瓦 土器器	口: 20.3 底: 肩: 高:	軟 透光 にねじ褐色	口縁「く」の字形に板 する	外面: 口縁部黒化で 体部横割れ 内面: 黒化	口縁
H2-5	瓦 破片 土器器	口: 底: 肩: 高:	軟 透光 にねじ褐色		外面: 斜割り 内面: 黑化	
H2-6	石 釜山系器	口: 底: 肩: 高:		扁平な自然石使用	外面: 斜面に窓った痕あり 内面:	頭部
H2-7	石 釜山系器	口: 底: 肩: 高:		扁平な自然石使用	外面: 斜面に窓った痕あり 内面: 窓いた痕あり	1/4頭
H2-8	瓦 破片 土器器	口: 底: 肩: 高:	やや硬 透光 にねじ褐色		外面: 斜割り 内面: 黑化	
H2-9	瓦 破片 土器器	口: 12.7 底: 肩: 高:	やや硬 透光 にねじ褐色		外面: 口縁部黒化で 体部横割れ 内面: 黑化	口縁部
H3-1	瓦 破片 土器器	口: 底: 5.6 肩: 高:	軟 透光 にねじ褐色		外面: 亂擦柱頭部細い痕 内面: 黑化	頭部
H3-2	輪縁車輪 片土器器	口: 底: 4.5 肩: 高:	軟 透光 淡褐色	車の窓部分を空めたもの	外面: 亂擦柱頭部細い痕 内面: 黑化	頭部
H3-3	环 破片 土器器	口: 底: 肩: 高:	軟 透光 淡褐色		外面: 口縁部黒化で 内面: 黑化	口縁

## 昌黎寺廻向遺跡出土遺物観察表(2)

法の下部地質

出土位置	種類	測量(cm)	監定・識別	器形の特徴	整形の特徴	遺存・備考
H3-4	軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや深 黒褐色		外彌:開口 内面:無	
H3-5	重 軽 土器	口: 底: 20.5 肩: 高:	やや浅 黒褐色		外彌:背開口 内面:背	脚
H3-6	重 軽 土器	口: 底: 12.0 肩: 高:	やや深 黒褐色	底平底	外彌:窓かれたよう窓がある 内面:無	脚1/3強
H3-7	重 軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや深 黒褐色		外彌:開口 内面:無	脚
H3-8	軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや浅 暗褐色		外彌:無 内面:黒い模様ある	
H3-9	軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや浅 灰白色		外彌:無 内面:無	
H3-10	重 土器	口: 底: 肩: 高:	やや浅 灰褐色		外彌:底による膨張感 内面:無	脚
H3-11	瓦	口: 底: 肩: 高:	やや浅 灰白色	二枚重り合せ	外彌:無 内面:粗面有り	
H3-12	軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや深 褐色		外彌:開口 内面:無	
H3-13	瓦	口: 底: 肩: 高:	やや浅 灰褐色		外彌:無 内面:粗面有り	
H3-14	軽 土器	口: 底: 肩: 高:	やや深 褐色		外彌:輪郭線有り 内面:	
H3-15	石 劍山岩系	口: 底: 肩: 高:		扁平な自然石使用	外彌:両面とも磨った痕有り 内面:	頭
H3-16	石 劍山岩系	口: 底: 肩: 高:		扁平な自然石使用	外彌:両面とも磨った痕有り 内面:	1/2強
H3-17	石 劍山岩系	口: 底: 肩: 高:		打撲痕有り 三角形を呈す	外彌:一部に磨った痕有り 内面:	頭
H3-18	石 劍山岩系	口: 底: 肩: 高:		自然石使用	外彌:一部に磨った痕有り 内面:	一頭

## 昌楽寺廻向Ⅱ遺跡出土遺物観察表(3)

測定の基準

出土位置	種類	法線(cm)	肚・盤・色調	器形の特徴	蓋形の特徴	遺存・備考
H3-19	石	口: 底: 厚:		丸盤	外面:一概に磨かれており 内面:	圓
H3-20	石	口: 底: 厚:		丸盤	外面:一概に磨かれており 内面:	圓
H3-21	石 剣端系	口: 底: 厚:		自然石使用	外面:兩面に磨かれており 内面:	1/4強
H3-22	石 剣端系	口: 底: 厚:		自然石使用	外面:一概に磨かれており 内面:	一概
H3-23	石 剣端系	口: 底: 厚:		自然石使用	外面:一概に磨かれており 内面:	一概
H3-24	石 剣端系	口: 底: 厚:		扁平な自然石使用	外面:兩面に磨かれており 内面:	圓
H3-25	磨片	口: 底: 厚:			外面: 内面:	
H4-1	鐵 破片 土器	口: 底: 厚:	やや 酸化 暗灰色	口縁部からやや内板	外面:口縁部は黒で 内面:黒で	口縁部
H4-2	石 剣端系	口: 底: 厚:		扁平な自然石使用	外面:兩面に磨かれており 内面:	圓
H4-3	磨 土器	口: 底: 厚:	やや 酸化 暗色		外面:黒が濃く酸化 内面:	
H4-4	鐵 破片 土器	口: 底: 12.0 厚:	やや 酸化 暗色	底部平坦	外面:黒が濃く酸化 内面:黒で	底部1/4強
H4-5	磨 土器	口: 底: 厚:	やや 酸化 暗色		外面:黒が濃く酸化 内面:黒で	
H4-6	磨 土器	口: 底: 厚:	やや 酸化 暗色		外面:黒が濃く酸化 内面:黒で	口縁部
H4-7	土器	口: 8.0底: 4.6 厚: 1.5	やや 酸化 暗色	底部堅正在りひめ少 至	外面:底による黒が濃く 内面:黒で	はむき
H4-8	泥鐵 土器	口: 21.0底: 厚: 24.5高:	やや 酸化 暗色	口縁部直立化粗立 鐵塗り付	外面:口縁部直立化粗立 内面:黒で	口縁~底

## 昌黎寺廻向Ⅱ遺跡出土遺物観察表(4)

法量の下限は確定

出土位置	種類	法量(cm)	胎土・賦・色調	器形の特徴	整形の特徴	直角・斜角
H4-9	軽 織機器	口: 底: 高:	底元 白色	高台脚付	外彌;頭部削り 内彌;底	斜
H4-10	軽 織機器	口: 底: 高:	底元 白色		彌;頭部削り 内彌;底	斜1/3強
H4-11	石 劍端添	口: 底: 高:		全然歪曲	彌; 彌;	
H4-12	軽 土器	口: 底: 高:	底元 白色		彌;頭部削り 内彌;頭部削り	
H4-13	更 軽 織機器	口: 底: 高:	底元 白色		外彌;背孔略目 内彌;背孔凹文	
H4-14	軽 土器	口: 底: 高:	底元 白色	貼り付け高台脚付	外彌;底基部削り 内彌;底	斜
H4-15	軽 土器	口: 底: 高:	底元 には焼褐色		外彌;底基部削り 内彌;底	斜1/2強
H4-16	軽 土器	口: 底: 高:	底元 には焼褐色		彌;彌 内彌;彌	
H4-17	軽 織機器	口:12.6底: 高:	底元 白色		彌;彌 内彌;彌	口彌-斜
H4-18	軽 織機器	口: 底: 高:	やや底元 白色		外彌;背孔略目 内彌;背孔凹文	
H4-19	軽 土器	口:12.4底: 高: 5.4	底元 には焼褐色	底部へ口端部削りながら 板	外彌;口端へ底削り 内彌;底	3/4強
H4-20	軽 土器	口: 底: 高:	底元 には焼褐色		外彌;底 内彌;底	斜
H4-21	軽 土器	口: 底: 高:	底元 には焼褐色		外彌;貼り付け高 内彌;底	斜
D1-1	磅 織機器添	口: 底: 高:		一部自然面を残す	彌; 彌;	2/3強
D1-2	磅 織機器添	口: 底: 高:		一部自然面を残す	彌; 彌;	3強

## 昌榮寺廻向Ⅱ遺跡出土遺物観察表(5)

測量の下線は推定値

出土位置	種類	縦(cm)	肚・底・色	器形の特徴	蓋形の特徴	通存・備考
D2-1	磨片 鐵	口: 底: 肩: 高:	黒 褐色	縄文中期 壺	外彌; 内彌;	外縄部繊維
D3-1	石	口: 肩:	底: 高:	丸頭	外彌; 内彌;	彌
D4-1	磚	口: 肩:	底: 高:		外彌; 内彌;	1/2彌
D4-2	磨片 鐵	口: 肩: 底: 高: 14.2	黒 褐色	縄文中期 壺系の土器	外彌; 内彌;	底部1/5残
D4-3	磨片 鐵	口: 肩: 底: 高:	黒 褐色 略赤褐色	縄文中期	外彌; 内彌;	
D4-4	磨片 鐵	口: 肩: 底: 高:	黒 褐色		外彌; 肩部に僅しく縫隙有 内彌;	
D4-5	磨片 鐵	口: 肩: 底: 高:	黒 褐色	縄文中期	外彌; 内彌;	
D4-6	磨片 鐵	口: 肩: 底: 高:	黒 褐色		外彌; 肩部に僅しく縫隙有 内彌;	
D6-1	石 剣塔系	口: 肩: 底: 高:		一面胡 中央凹有り	外彌; 内彌;	
P3-1	石斧 縄織系	口: 肩: 底: 高:		台形を呈す。	外彌; 内彌;	4/5彌
B4G-1	石 縄織系	口: 肩: 底: 高:		自然石鋤	外彌;両端部に打撲あり 内彌;	彌
B4G-2	石 剣塔系	口: 肩: 底: 高:		肩部自然石鋤	外彌;両面に窓いた痕あり 内彌;	彌
B4G-3	土鋤器	口: 7.5底: 4.2 肩: 高: 1.9	黒 褐色	底部が圧する	外彌; 口縁部強て 地盤在縫合有り 内彌; 壁に調整	彌
C2G-1	石 剣塔系	口: 肩: 底: 高:		自然石鋤	外彌; 端部に打撲あり 内彌;	1/2彌
C2G-2	裏 磨片 鏡器	口: 肩: 底: 高:	黒 褐色		外彌; 葵子模様 内彌; 刮削文	

## 昌楽寺廻向Ⅱ遺跡出土遺物観察表(6)

法量の下欄は推定値

出土位置	種類	法量(cm)	胎土・織・色調	器形の特徴	整形の特徴	遺存・備考
C4G-1	石 剣端頭	口: 底: 高:		自然石削成	外彌;西面に磨いた痕あり 内彌;	無
C4G-2	砾	口: 底: 高:			彌; 彌;	
C4G-3	砾 砂	口: 底: 高:		片面部に刃を付ける	外彌; 内彌;	
C4G-4	瓦	口: 底: 高:	敷地化 赤褐色		外彌;裏で 内彌;相	
C4G-5	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:白色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
C4G-6	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:白色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
C4G-7	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:淡褐色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
C4G-8	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:淡褐色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
C4G-9	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:白色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
C4G-10	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:白色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	
D1G-1	石 瓦 瓦端頭	口: 底: 高:		籠文焼の石瓦	彌;片面凹あり 内彌;	
D1G-2	瓦 端頭	口:12.8底: 底: 高:3.2	敷地化 には褐色	口縁部は直立さみに立ち上 がる	外彌;口縁部直立で 底部直立あり 内彌;直立	はむき形
D1G-3	織文土器	口: 底: 高:	敷地化 赤褐色	籠文中頸	外彌;織文が強く織目 内彌;	底盤
表1	瓦 軒	口: 底: 高:	裏:藍 底:灰色		外彌;背面引目 内彌;背面引目	

人骨出土状況　出土位置C-1グリット内、1号土塼と3号土塼の隙間に位置しており、出土地の高さ標高約122.54mを測る。すでに顎を剥げており、その埋葬態については複数でなかったが、骨の骨格は下顎(歯の骨を覗見)と、頭、足の一骨と思われる骨が7~8本確認できるが、骨はいたい状態にもかかわらず、取り出る際はほとんど崩れてしまう状態であった。出土遺物は頭骨から石が3個確認されたが、骨との関係づけは詳しく述べる。また、頭骨等ができる遺物は出土しなかった(図版2 No14を参照)。

## VI おわりに

昌榮寺廻向Ⅱ遺跡の発掘調査により、確認及び検出された遺構は、竪穴住居址4軒、土坑6基、ピット4基、井戸址1基が検出された。以下各遺構の特徴をまとめ、おわりとしたい。

1. 竪穴住居址についてはH-1、H-2はその範囲を確認できたが、H-3、H-4は範囲を確認するまではいたらなく、カマド位置と遺物の出土状況より推定した。住居址の平面形態は南北方向に長辺をとる方形の形態をとり、床面は貼り床の存在がH-1、H-2、H-3で確認され、特にH-1では全面に貼り床が検出された。H-4は貼り床は認められなかつたが、レベル値12.2.60m前後で層位が変わり(FP粒等を含む高粘質土から軽石粒を含まない柔らかい層)、カマドの火床と同レベルであるため、床面はこの近辺に求められた。カマドについては、H-4は残りが良く、煙道部が長く、住居址外に突出した形を取る。また、袖部はH-1、H-4ともに住居内に造り出されているが、形状は貧弱であった。周溝はH-2の一部で検出された。H-3付近では、焼土が数か所確認できたが、残りが悪く遺構の検出までにはいたらなく、数軒の住居址が重複関係にあったと思われる。出土遺物はH-1、H-2では貯蔵穴付近から出土しており、時期的には奈良時代頃と考えられる。H-3では破片が多く、器形からの特徴は判断しかねた。また、石の破片は自然石を使用しており、面を磨ったものが多く検出した。H-4では、平安時代のものと思われる遺物が検出された。
2. 土坑については調査区西側に多く検出した。平面形態も円形と歪な梢円形に分かれ、D-4土坑にいたっては、一部、壁の所在がはっきりしなかつた。出土遺物は、D-1、D-2、D-3、D-4で検出され、時期的には縄文時代中期の遺物と思われる。
3. ピットについては調査区西側に所在し、出土遺物はP-3の石斧が1点出土しただけである。
4. 井戸址については、時期を考察する遺物の出土が検出しておらず、時期は不明である。

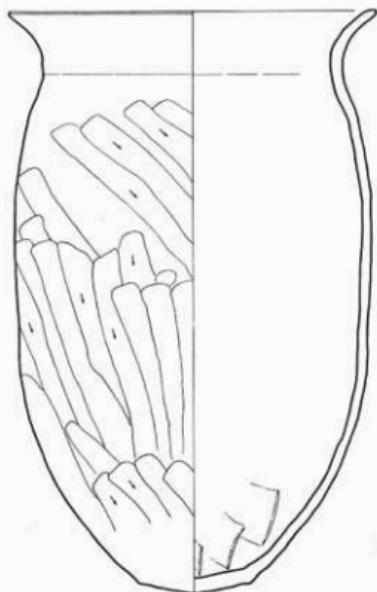
以上のように、本遺跡では縄文時代中期、奈良・平安時代とその歴史の痕跡を確認することができた。当地域周辺の傾向として縄文時代前、中期の遺構、遺物等は多く、続く弥生・古墳時代に入り減少する。その後奈良・平安時代にいたり住居址等、遺構、遺物の検出例は多くなる。この傾向は本遺跡にも見られるため、昌榮寺廻向Ⅱ遺跡は当地域の特色を具備した遺跡と言えよう。最後に本遺跡の調査が今後の調査、研究の一助になれば幸いと存じ、おわりに致します。

### 参考文献

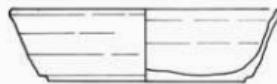
1. 「前橋市史 第1巻」 前橋市史編纂委員会 1971
2. 「陶邑古窯址群Ⅰ」 平安学園考古学クラブ 1966
3. 「清里・陣馬遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981



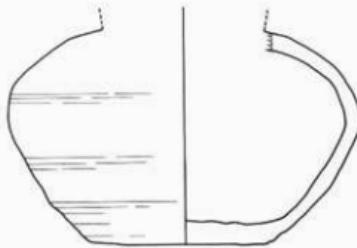
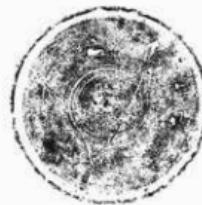
実測図1



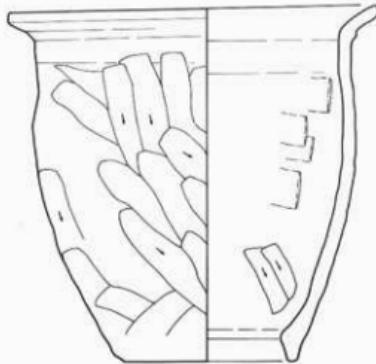
H1-1



H1-2



H1-3



H2-2



H2-1

0 10cm

実測図2



H3-1



H2-3



H3-2



H2-4



H4-7



H3-6



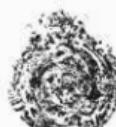
H4-8



実測図3



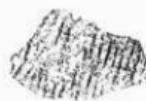
H4-13



H4-14



H4-15



H4-18



H4-19



H4-21



B4G-3



实测图4



C2G-2



C4G-5



C4G-6



0 10cm

C4G-7

実測図5



C4G-9

C4G-10



D1G-2



表1



|



H2-6

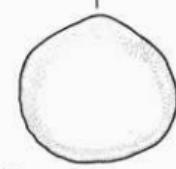


-



H3-17

H3-24

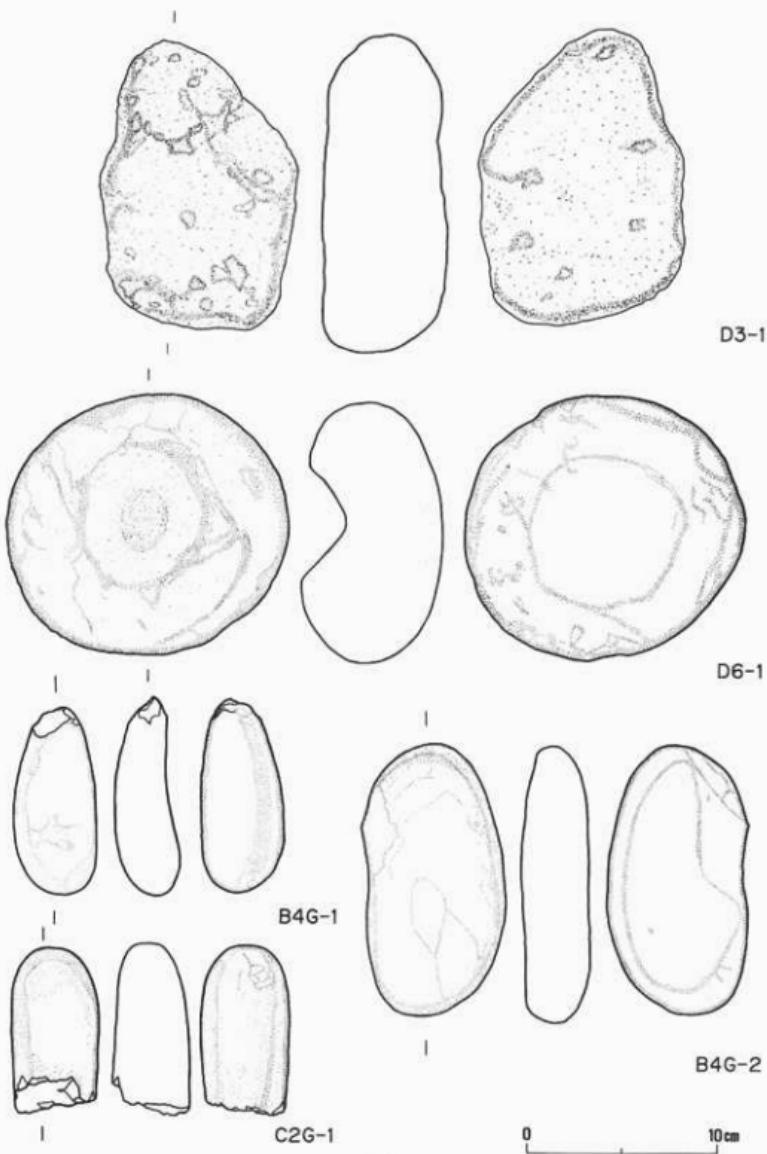


H4-2

0

10cm

実測図6



実測図7



C4G-1

D1G-1



D1-1

D1-2



D4-1

P3-1



C4G-2

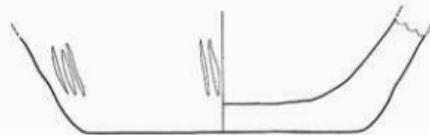
C4G-3



实测图8



D2-1



D4-2



D4-5



D1G-3



H3-11



H3-13



0 10cm

C4G-4



1. 現況（作業風景）



5. H-1貼床（北より）



2. H-1出土遺物状況



6. H-2出土遺物状況



3. H-1



7. H-2遺物と貯蔵穴



4. H-1 カマド



8. H-2

図版2



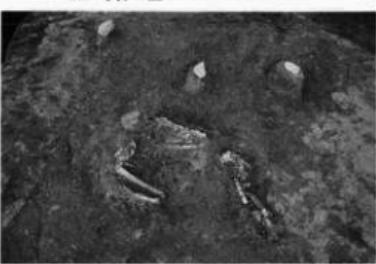
9. H-3出土遺物状況



13. 井戸址



10. H-3



14. 人骨出土状況



11. H-4近辺出土遺物状況



15. 遺跡西側全景



12. H-4カマド



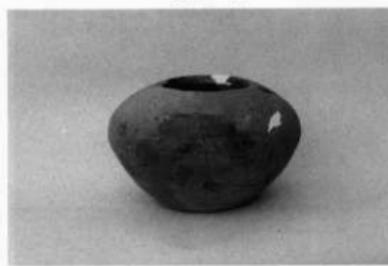
16. 遺跡全景



H1-2



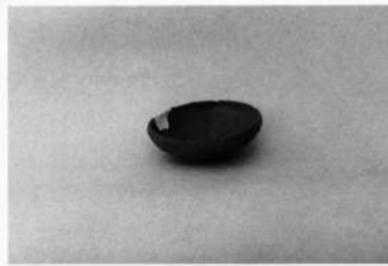
H2-3



H1-3



H2-4



H2-1



H4-7



H2-2



H4-19



